

「生きる力」の育成における家庭科教育の課題 —幼児の生活時間から見えてくるもの—

山口 明美

要 旨

本研究では、豊かな質の高い社会を構築するため生活に関する諸事を多面的に理解し、自身の生活の場で選択・実践していく力を「生きる力」と捉え、子どもの育ちの現状と背景を通して子どもの育ちに影響を及ぼしている要因を見出すことにより、家庭科教育における「生きる力」の育成を考えることを目的とした。

調査の結果、以下の明らかとなった3点から家庭科教育の課題として見えてきたものを報告する。①家族サイズが小さくなり、人間関係と生活空間が狭い。②遊びを通して得られていた様々な体験の機会が失われつつある。③大人優先の子育てである。以上の点から今後の家庭科の課題と言えるのは、これからの時代をになう児童、生徒、学生の教育が問われることとなる。生活に関する教育は家庭科として、小学校、中学、高等学校で実施され、広範囲の内容であるにもかかわらず時間数が少ないことに問題はあるが、男女ともに自主的に生活を営む立場で教育がなされることがさらに求められる。また、大学教育の初期段階での教育の機会を設ける必要性もあると考える。

キーワード：生きる力、自立、家庭科教育、人間関係の希薄化、課題解決能力

I. はじめに

2002年度から実施された、小・中学校の学習指導要領において、子どもが自ら学び、自ら考える「生きる力」を育成することが新たに加えられ、さらに2008年に答申を受けて改善された新学習指導要領においても「生きる力」の育成は重要教育目標の一つとして位置づけられた。一方、社会現象として、モラトリアム、フリーター、パラサイトシングル、モンスターペアレントなどのことばに形容されるテーマは「自立」である。つまり、一人の人間としての生き方が問われる現代である。

そこで、本研究では豊かな質の高い社会を構築するため、生活に関する諸事を多面的に理解し、自身の生活の場で選択・実践していく力を「生きる力」と捉え、その「生きる力」の育成において家庭科教育のになうべき課題は何か、また、現状の家庭科教育の課題は何かを見出すことを目的とした。そのため、先ず、子どもの育ちの現状と背景を通して、子どもの育ちに影響を及ぼしている要因を見出すことにより、家庭科教育における「生きる力」の育成を考えた。

稚園)、保育園(J保育園)、また神奈川県横浜市にある保育園(Y保育園—2園を含む)に通園している保護者を対象に調査をお願いし、S幼稚園74人、J幼稚園94人、J保育園44人、Y保育園68人、合計280人の回答を回収した。

回答者は全員母親であり、回答者の就労状況は図1のとおりであるが、専業主婦率は幼稚園72%、保育園2%であった。

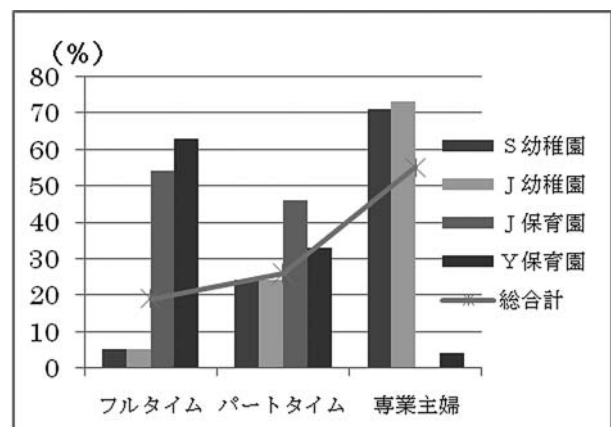


図1 母親の就労状況

II. 研究方法

(1) 対象

鹿児島県薩摩川内市にある幼稚園(S幼稚園, J幼

(2) 実施時期

2009年12月に各園の保育者を通して保護者に質問紙を配布し2週間後に回収した。

(3) 調査内容

質問紙は対象児の年齢、対象以外の子どもの人数、

家族数、家族形態など対象児のプロフィール把握のための項目のほかに、子どもの育ちの現状と背景を知ることができるような内容で構成した。

「子どもに関する内容」では、起床・就寝時間とその状況、食事時間と摂取状況、子どもの役割、子どもの基本的生活習慣、就学前教育、子どもとの関わり、近隣・友達との関わりについての7項目、「保護者について」では、自分のための時間、地域の行事参加、近所つき合い、近隣での居心地、子どもとの会話時間の5項目で構成した。すべて回答選択肢からの選択方式を用いた。

(4) 分析方法

質問紙の調査により得られた回答は、マイクロソフトエクセル2007を用いて解析を行った。

Ⅲ. 結果と考察

1. 子どもに関する内容

(1) 起床・就寝時間と状況

図2は起床時間を園種別に見たものであり、図3は起床状況を園種別にみたものである。幼稚園では起床時間のピークは7時～8時であり、保育園は6時～7時である。これは母親の就労状況との相関関係が見られた。また、起床状況は6割の親が起こしているが、自分で起きる習慣をつけさせていることも伺える。さらに、きょうだい数の増加とともに親が起こす割合が少なくなっているのも特徴である。

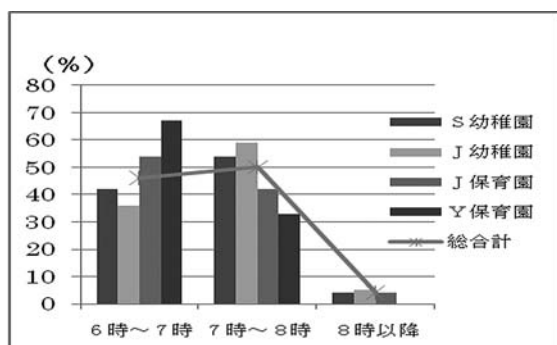


図2 園種別に見た起床時間

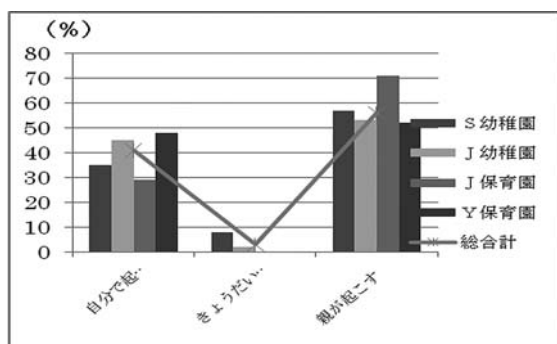


図3 園種別に見た起床状況

図4は就寝時間を園種別に見たものであり、図5は就寝状況を園種別に見たものである。就寝時間については幼児の生活が以前に比べて夜型化している傾向にあると言われるが、9割は22時までに就寝している。これは他の研究データ¹⁾と比較しても同様の傾向がみられ、一時よりも早寝になりつつある。

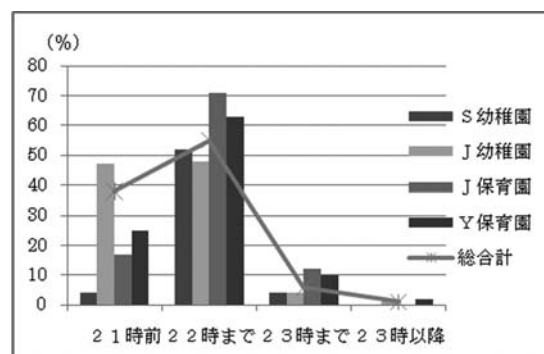


図4 園種別に見た就寝時間

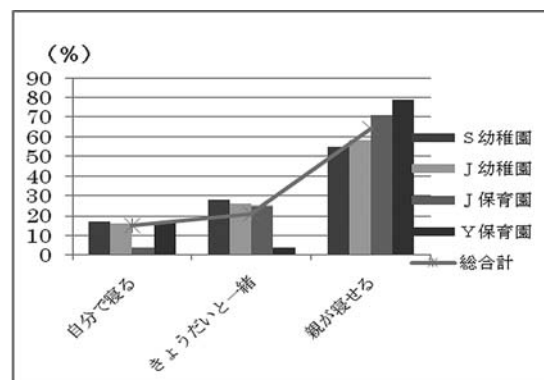


図5 園種別に見た就寝状況

就寝状況は親が寝せるが6割を超えている。しかし、起床状況と同じくきょうだい数の増加に伴い、親が寝せるより自分で寝る、きょうだい同士で寝る傾向が見られる。

(2) 朝・夕食時間と摂取状況

朝食は9割の子どもが8時までにすませており、殆どの子どもが朝食を毎日摂っている。図6は夕食の時間を園種別に見たものであり、図7は夕食状況である。夕食は6割が20時までに摂っており、夕食時間と就寝時間とは相関関係がある。

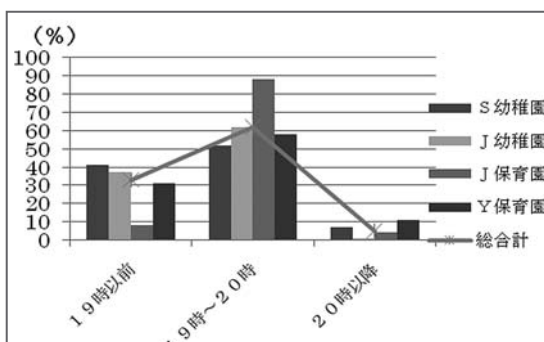


図6 園種別に見た夕食時間

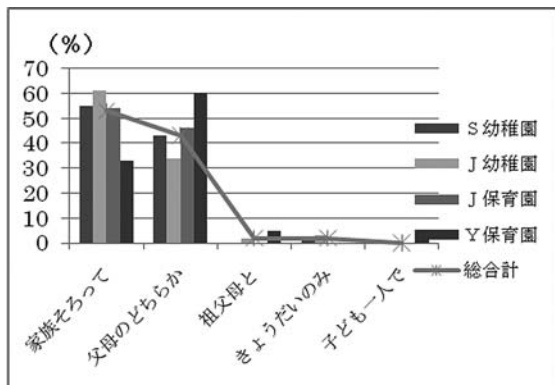


図7 園種別に見た夕食状況

夕食は、家族全員あるいは父母のどちらかと一緒に毎日摂っている家庭が7割を超えている。

(3) 子どもの役割

子どもにやってほしい内容の多くは、図8の子どもに求める役割のように、自分のことは自分で行う習慣を身につけさせたいという思いが感じられる。また、子どもに持たせている役割を図9に示しているが、最も多いのが食事準備（箸を並べる、食器を運ぶ、料理を運ぶ）である。その他に自分のことをしっかりやらせたいとの思いが感じられ、しつけが重んじられているようである。

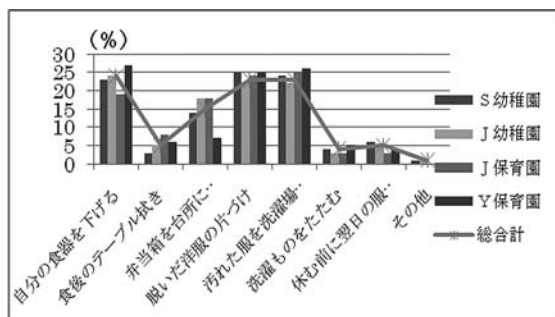


図8 子どもに求める役割

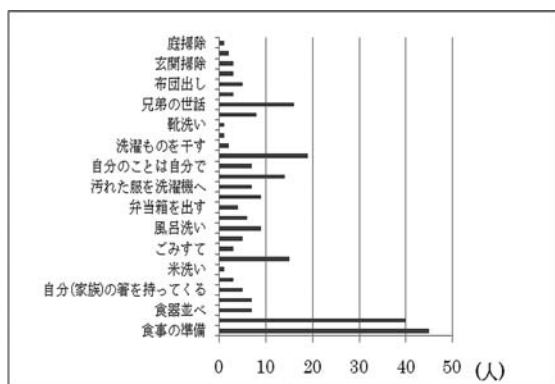


図9 子どもにもたせている役割

(4) 子どもの基本的生活習慣

図10は、家庭でしつけるべき内容を園種別を示した。家庭でしつけるべきものに対して、子どもの役割と同様、多くの家庭が基本的な生活習慣、礼儀作法、

また自分のことは自分でやる（例えば、遊び後の片付け）、思いやりなどを重視している。しかし、忍耐力、豊かな情操、積極的な行動力についての重要度が感じられない。また、傾向としてあまり変化は見られないが、きょうだい数の増加に伴い自分のことは自分でやることへの要求度が高くなっているのが特徴的である。

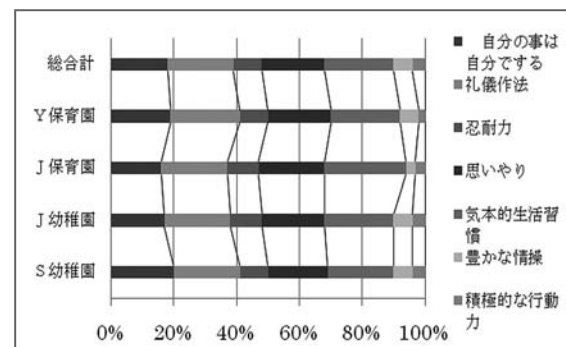


図10 園種別に見た家庭でのしつけ

これは図11・12のように、子どもの育てやすさ、育てにくさの理由にも見られる。

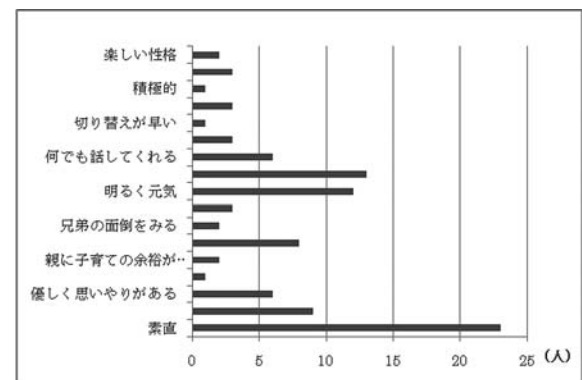


図11 育てやすい理由

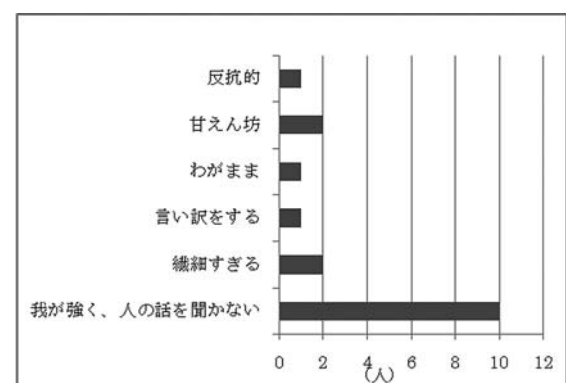


図12 育てにくい理由

素直でよく話を聞く、聞き分けが良い、思いやりなどがあるが育てやすい要因となっている。一方、育てにくい理由として我が強く、人の話を聞かない、反抗的、我がままなどが要因となっている。つまり、親にとって“良い子”が求められており、しつけ教

育がこのような形で表れているものと考えられる。
図13は子どもに対する家庭でのきまりの遵守度である。多くの家庭が子どもに対して6~7割がきまりを設け、かなりの高い確率(6割)できまりを遵守させている。また、図14には子どもに対するきまりを示しているが、様々なきまりをもたせており、しつけを目的としたきまりごとが多いようである。

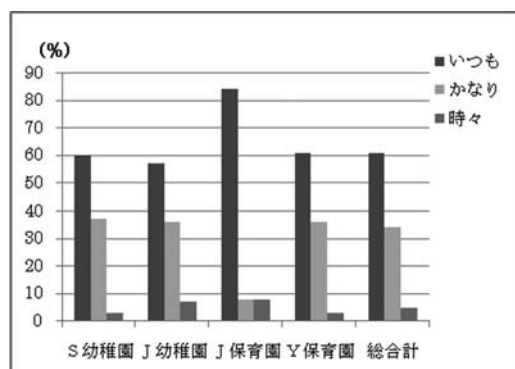


図13 園種別に見たきまりの遵守度

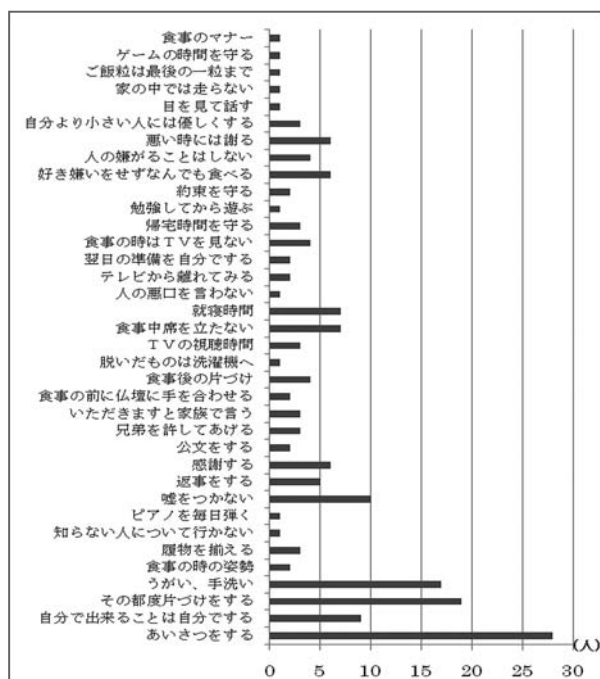


図14 子どもに対するきまり

(5) 就学前教育

図15は、重要と思われる就学前教育を園種別で見たものである。文字や数などの学習より人間関係づくりなどの他者への思いやりを重視するとともに、家庭でのきまりの内容を含め基本的生活習慣の形成に力を入れて日々の子育てをしていることが伺える。また、きょうだい数が増すごとに情動的なものに目が向いているというのも特徴である。例えば譲る、ともに使うなどの他者への思いやりにも力が入っている。これは、きょうだいの中で協調性や思いやる心が育ちあうことを学ばせたいとの思いが感じられる。

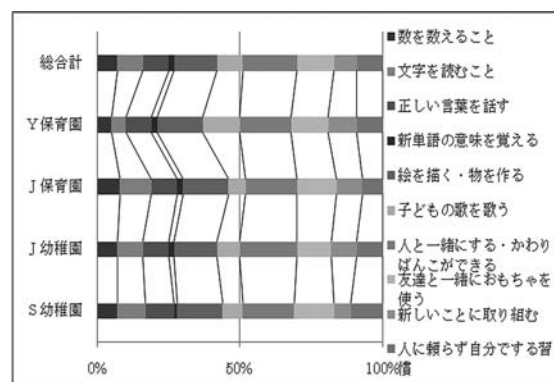


図15 園種別に見た就学前教育

(6) 子どもとの関わり

子どもとの関わりについて図16・17に示しているが、一日に子どもが過ごせる時間は平均4~5時間であるが、これは子どもに向き合っている時間というより、その空間に共に居る時間と捉えた方が良いでしょう。それは、子どもとの関わり方において7割の母親が改善点があることを指摘している。しかし、今の状態では改善が難しいことから現状の中で子どもとの関わり方に工夫が見られる(図17)。特に少ない時間に合って、密度の濃い関わり方がなされ、子どもと直接向き合う時間を確保している。

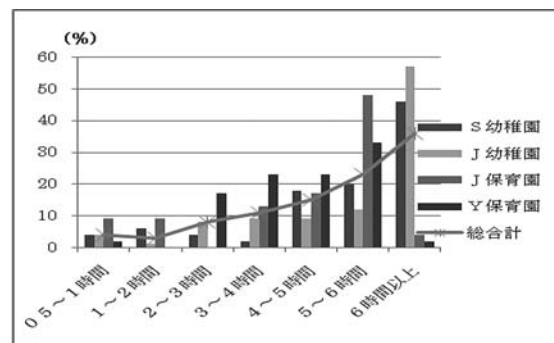


図16 子どもと過ごす時間

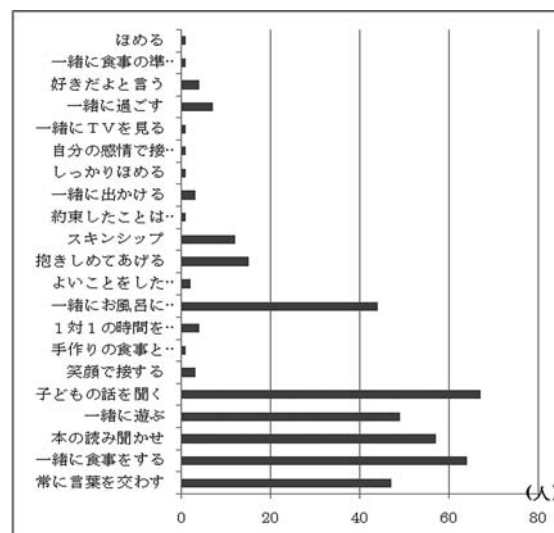


図17 大切にしている関わり方

(7) 近隣・友だちとの関わりについて

図18は帰宅後の居場所であるが、帰宅後は家の中で過ごしていることが多く、過ごし方として遊びとテレビ視聴が多い。遊びの集団数は3～4人が最も多い。この遊びの相手は母親の場合やきょうだいで遊ぶことが多く、きょうだいが多くなるとさらに、家の中できょうだい同士で遊ぶ傾向が見られる。

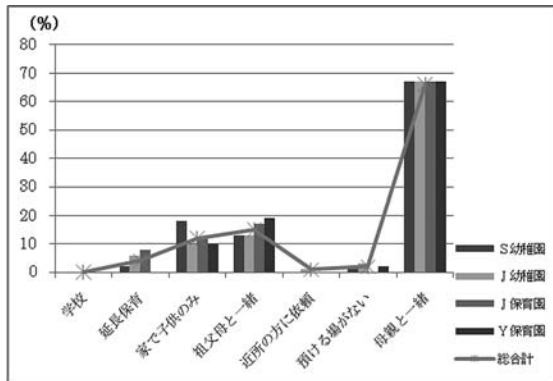


図18 帰宅後の居場所

外遊びの場合、近所の仲間や幼稚園などの知り合いの仲間と過ごしている。遊びの場所は図19に示しているが、家の中が最も多く、外遊びが少ない現状であることが分かる。その遊びの具体的内容は図20に示すが、この図からも家の中で過ごしている時間が多いことが分かる。

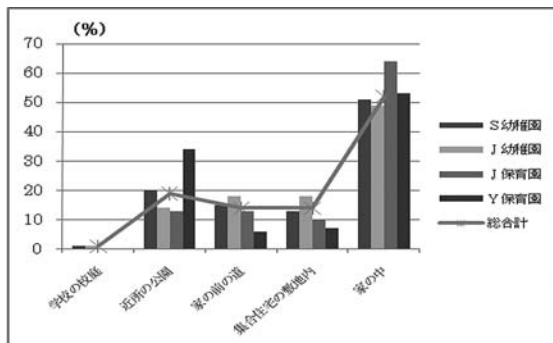


図19 子どもの遊び場所

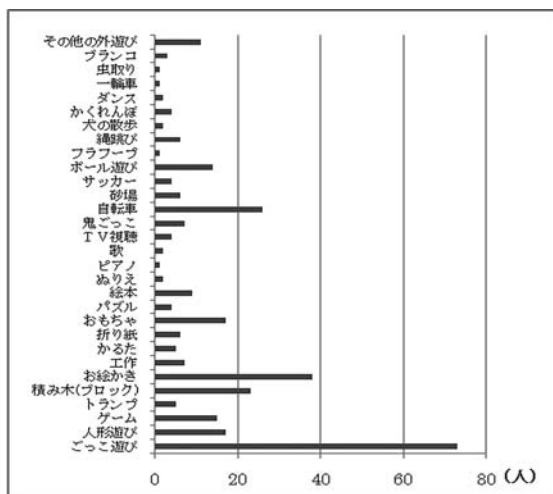


図20 遊びの内容

2. 保護者について

保護者に子どもとの関わりの観点から、自分が自由に使える時間と子どもとの会話時間を質問した結果、専業主婦率の低い保育園利用者の母親の3割が自分のための時間を1～2時間と答えている。また、子どもとの会話時間も2時間以内が7割程度である。これは子どもと過ごせる時間の約半分の時間を占めることになる。

図21・22は園種別にみる保護者の近隣での居心地と近所つきあいについて示したものである。

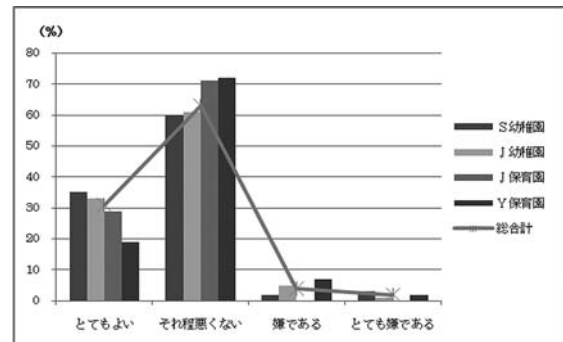


図21 保護者の近隣での居心地

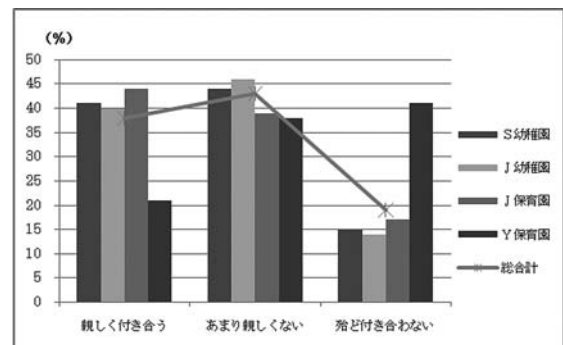


図22 保護者の近所つきあい

母親の近隣との関係をみると、9割以上の人が近隣での居心地は良いと答えているが、近所つき合いを見ると積極的に関わっている人が4割程度である。これは、子どもの地域への行事参加にも反映されている。

3. 家族について

家族形態は図23に示すように核家族がほとんどであり、きょうだい数(図24)は約7割が1～2人である。そのため、家族数も少なく関わる人間関係は非常に狭いことがわかる。

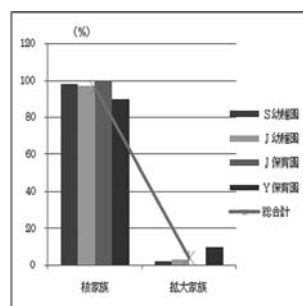


図23 家族形態

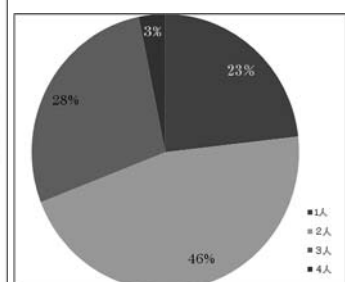


図24 きょうだい数

IV. ま と め

子どもの育ちの現状と生育環境から、生きる力の育成を阻害する要因を以下の3点にまとめることができる。

1. 人間関係の希薄化、地域における地縁的なつながりの希薄化

家族サイズが小さくなり、人間関係と生活空間が狭いという現状が明らかとなった。これは、国勢調査報告²⁾の推移からも明らかであり、毎日一緒に暮らしている家族の人数が年々少なくなったという事実は注目に値する。60年代頃から、世帯人数が年々少なくなり、最近では3人を切るところまで減っている。家族構成としている家族員同士の人間関係を見ると、5人で暮らしていた当時の人間関係の数を計算すると、「子と祖父」「姉と父」といった関係も含まれ、全部で10種類になる。ところが3人になると、「父と母」「子と父」「子と母」の3種類だけになる³⁾。このように核家族と少子化により、家族内での人間関係とそれに伴う相互行為の減少が、社会力の形成を阻害する方向で大きく影響を及ぼしていることは推測できる。また、母親自身が内向きになっており、近隣との関わりが減少することに拍車をかけていると言える。

2. 子どもが自立する上で、実現や成功などのプラス体験をはじめ葛藤や挫折などのマイナス体験の減少。

現状は外遊びより、室内遊びの増加傾向にあること、また遊び相手が、母親、きょうだいの割合が高く仲間との関係が希薄になっている。更に帰宅後の過ごし方では遊びについてテレビ視聴時間が多くなっている。テレビはすでに私たちの日常生活の空気のような存在になっている。しかし、長時間テレビ視聴の子どもには、社会性、自信、親切さ、協調性、責任感、忍耐力、学習意欲の諸点において問題が多いとの先行研究にもある⁴⁾が、子どもたちが毎日数時間視聴し続けた場合の累積効果は相当なものである。これらから、遊びを通して得られていた様々な体験の機会が失われているといえる。

自然環境と触れ合う場合は、心身の健全な発育のために重要である。つまり、子どもが群れる場の重要性、多くの人によって子どもが育まれる場の重要性、子どもの視点に立つ環境形成の場の重要性を意識する必要があると思われる。これらの体験を通して、正義感、道徳観、学習意欲、課題解決能力を育てることができるが、現代の子どもたちは、その大切な機会が減少し奪われているといえる。

3. 子どもの自立心、伸びようとする芽、自制心や耐性、規範意識等が十分に育ちにくい。

親にとって“良い子”を子どもに求めているため、親の関与が大きく、大人優先の子育てになっているようである。それによって子ども自らの力が育ちにくく、依存性の強い子どもを育てる環境になっている。

V. 今後の家庭科の課題

今後、ますますこれからの時代をにう児童、生徒、学生の教育が問われることになる。特に生活に関する教育は家庭科として、小学校、中学、高等学校で実施されているが、広範囲の内容であるにも関わらず授業時間数が減少していることに大きな問題はあるが、男女ともに自主的に生活を営む立場で教育がなされることが求められる。また、大学教育の初段階での教育の機会を設ける必要性もあると思われる。

VI. 謝 意

最後に、本研究の調査にご協力をいただきました調査対象園の園長先生をはじめ諸先生、保護者の皆様に謝意を表します。

参考文献

- 1) Benesse 教育研究開発センター：第3回幼児の生活アンケート報告書（国内調査）
- 2) 総務庁統計局：国勢調査報告 1955 年以降
- 3) 門脇厚司：子どもの社会力、岩波新書 129, 1999
- 4) 門脇厚司：子どもの社会力、岩波新書 13, 1999

Challenges of homemaking education in development of power live

Akemi Yamaguchi

Department of Nutrition, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : ability for lives, self-reliance, education of home economics ,
dilution of interpersonal relationship, problem solving skill

Abstract

Thinking about "living force" in home economics education training by factors has had impact through a child's growth and background to the growth of the child "live" and captures the power to build high-quality rich in this research, Social Affairs about the life understand multifaceted and in place of the life of their own choice and practice, to find that purpose. One result of the investigation became clear three areas from sight as homemaking education issues to report.

(1) Smaller family size, narrow relationship and living space. (2) Various experiences had been obtained through a play opportunity lost gradually. (3) Bringing up a child in adult priority. Said that future economics challenge in terms of more than would be questioned is the education of the children whose age from this, pupils and students. It position on life education and conducted in elementary school, middle school, high school home economics as despite the wide range of content in less time that problem, but men and women together voluntarily to life engaged in education is required in addition. Also, think that necessity establish opportunities for education in the early stages of university education.
